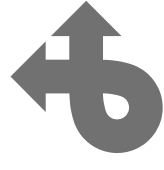


新制作イ作

SHINSEISAKU



Vol.73 / 2017

夏号

新制作協会 広報誌

81st



新鮮なる造形を

創立80周年の節目を終え、新制作協会は新たな気概を持って進み始めました。新制作協会は、情熱ある若き9名の画家が1936年に結成し、1939年に彫刻部、1949年には建築部（現在のスペースデザイン部）が参加し、総合美術団体として日本の芸術文化に大きな刺激を与えて来ました。会員諸氏は、創立精神に敬意を持ち、前進し続けています。

発足時の協会規約の綱目のひとつに、「純粋芸術の責任ある行為に於いて新芸術の確立を期す」とあります。この言葉は時代を越え、強い意志として受け継がれています。

しかし、組織、集団であるが故に、色褪せる宿命を背負わなければなりません。80年の年月は、日本の芸術文化、社会と生活環境変化の流れの中で諸問題も多く生み出しました。会員諸氏の新旧の変化、作家の減少など多々ありますが、その時代の中で、質の高い作品が多く見受けら

れるのは、新制作の精神である権威を持たず、すべてが平等である、といった空気から生まれたものであると考えます。自由で、新鮮な造形を求めることは、その時代に生きていることに繋がります。

芸術文化は古今、美術、文学、音楽と時代の中で響き合って現代に至っています。異なった表現方法で共存し、発信されたものが現代社会にどのように位置付けられ、受け入れられているのか、その現在位置を確かめ、自己を見出さなければなりません。

能楽者の世阿弥の花伝書の中に、芸術が生まれるというのは、「能を演じる者と、観る側との中間に芸術は生まれる」とあります。演者が芸術ではなく、観る側が居て初めて芸術が生まれ、作品として扱われるのです。観者に感動を与え、魅力ある作品に出会えば自ずと観者も多く生まれます。



委員長
いしまつ とよあき
石松 豊秋

環境が人を育てます。新制作は、その年ごとに将来を期待される作家を生み出しています。

公募美術団体である新制作は、作品発表の戦場でもあります。お互いに刺激を受け合い、次の作品発表に生かす「何か」を生み出す原動力と環境を得る場でもあります。

若い力で日本の芸術文化を支配する社会、システムそのものを転換させる意欲が現代には必要ではないかと私は感じています。

一緒に考えてみませんか。

第81回 新制作展

9.20 (水) — 10.2 (月)

10:00 ~ 18:00 (入場 17:30 まで)

[開催時間等は変更の場合あり。開催状況の確認は、国立新美術館HP・ハローダイヤル(03-5777-8600)で]

国立新美術館

入場料 一般：800円 (学生・65歳以上無料)

休館日 9/26 (火)

金曜日 20:00 終了 (入場 19:30 まで)

最終日 10/2 (月) 14:00 終了 (入場 13:00 まで)

新制作展に初めて応募される方、すでに作品応募の準備をしていらっしゃる方へ…

新鮮な力作をお待ちしています。

応募情報は、美術関係誌広告、協会発行の公募ポスター・リーフレット・応募規定、公式ホームページをご覧ください。

新制作協会賞および新作家賞受賞者には、賞牌として絵画部会員・岡崎 紀 氏の作品が授与されます。

応募のお申込みとお問い合わせは

●Tel 03-6233-7008

●Fax 03-6233-7009

●E-mail webmaster@shinseisaku.net

●公式HP <http://www.shinseisaku.net/>

新制作協会

〒160-0022

東京都新宿区新宿6丁目28番10号

大阪屋ビル202号

2017年度協会新代表委員

[代表委員会]

委員長 石松 豊秋 (彫刻部)

副委員長 佐藤 泰生 (絵画部)

// 中野 威 (SD部)

代表委員

● 絵画部

杉野 和子、竹内 一、藤田 邦統、眞野 真理子

● 彫刻部

加藤 裕之、永津 守、人見 崇子、吉村 維元

● SD部

岡本 泰子、片岡 葉子、二井 進、若松 美佐子



代表委員

[合同委員会]

●会計委員会 ●図録委員会 (図録 / 広告)

●美術館担当委員会

●広報委員会 (広報・PR / 会報 / HP)

●IT委員会 ●受賞作家展委員会

●慶弔委員会 ●美術団体懇話会



第81回展ポスター

各部より

絵画部

藤田 邦統

絵画部では、80回記念展から新たなカテゴリーを設け、出品される方々の制作・発表の意識をより具体化させることとなりました。

「小さくてもイイものはイイ」 カテゴリーⅠ
「あらゆる可能性の」 カテゴリーⅡ
「超大作のエネルギー」 カテゴリーⅢ
「今だからやれること！つくれる作品」

データ画像審査・under30以上4つのカテゴリーがあり、カテゴリー別に審査が行われます。何をいかに表現するのかを確認して、自分に合ったカテゴリーを選択していただけたと思います。

作品輸送の困難にも対応しております。海外や遠隔地からの出品者や大作の出品者のために作品を巻いて送付して木枠に張って搬入し、はずして返送するシステムや、北海道・東北・栃木の出品者のためのチャーター便を設け、搬入出のバックアップを致します。

81回展のテーマは「新鮮なる造形を！」です。問題意識がぶつかり合う、緊張感あふれる展示空間となるよう、新制作が掲げる「向上と進歩」のイメージがくっきりと浮かび上がる展覧会をめざします。

●オープントーク / 絵画展示室

9/20 (水) 14:00 ~ 16:30

●ギャラリートーク / 絵画展示室

9/24 (日) 14:00 ~ 17:00

●ポストカード・グッズ販売・チャリティー展作品販売 / 絵画展示室2F 奥の休憩室 / 会期中



カット・松浦安弘

彫刻部

加藤 裕之

彫刻部では81回展より、一般応募作品のサイズ規定を変更致しました。単体作品、組作品とも、作品サイズはフリーとしました。作品運搬用エレベーターに乗せられればよく、自由で闊達な作品応募の更なる可能性を開いたといっているでしょう。

彫刻作品は大きい、重いといったことから、搬入、搬出にかかる負担は、人的或いは機械的にもそれ相当のものがあつ、サイズ規定撤廃は寧ろ時代に逆行しているかのようでもあります。表現としての可能性に、足枷となる規定をなるべく取り払うという決定を彫刻部はしたわけです。

若く意欲的で、自分の表現の可能性を模索する応募者の皆さんが、新制作の今後を担っているといっても過言ではありません。会員と一緒に切磋琢磨し、新しい新制作の可能性を開いていきましょう。

繊細でいて大胆、斬新にして核心を突く、魅力的な作品に溢れる81回展にしていきたいと思います。

●オープントーク / 彫刻展示会場

9/20 (水) 15:00 ~ 16:30

新会員、受賞作家の作品を前に瑞々しいトークをご静聴下さい。作品や作者の考え、制作過程についてなど、ご質問にもお答えします。お気軽にご参加ください。

●ギャラリートーク / 彫刻展示会場

9/24 (日) 14:00 ~

会期半ば、会員のナビゲートで彫刻展示会場を巡るアートツアーです。作者本人による作品解説や会員による作品講評、お客様の疑問にお応えしながら巡ります。作者の生の声を聞ける数少ない機会です。どうぞご参加ください。

●チャリティー販売 / 1F 休憩室

会員の小作品、デッサン等を展示販売致します。

●ポストカード販売 / 1F 休憩室

作品写真のポストカードを格安でお求めいただけます。どうぞご利用ください。

●QRコード

会員、受賞者の作品題名カードにQRコードが付いています。作者自身の作品に対するコメントを見ることができます。

スペースデザイン部

若松 美佐子

スペースデザイン部には、室内、野外展示の一般審査部門と室内展示のミニチュール部門を設けています。いずれもスペースをデザインする事を基に、あらゆるジャンル・技法からのアプローチ作品が様々に展示されます。

一般審査部門では、作品サイズの幅制限を2.5m 以上でも可能とし、展示方法も壁面・宙吊り・床置き・光源を持つ作品には、照度をおさえた空間を用意致します。一方ミニチュール部門では、“制限されたサイズと自立する展示”との規定の中で、一般審査部門とは異なる魅力を持った作品が出品されます。本年も心に残る展示空間をご覧いただける事と思います。

会場においては、ご来場者と作家との交流をフリートーク形式で行い、研修室においては、作家によるレクチャーとワークショップも企画致します。

また、会員制作のミニ作品「スペースキューブ」や「作品カード」の販売を行い、チャリティー活動も続けてまいります。

●レクチャー / 3F 研修室

9/23 (土) 14:00 ~ 15:30

●フリートーク / スペースデザイン展示会場

9/23 (土) 16:00 ~

●チャリティー販売 / スペースデザイン展示会場入口 / 会期中



カット・濱田卓二

受賞作家展 - 新制作協会賞、第80回記念賞および新作家賞の副賞として企画された受賞者の新作展覧会です -

絵画

銀座 井上画廊

1/16 MON - 1/21 SAT

第 80 回記念賞 受賞者

■ 蛭田 美保子

新作家賞 受賞者

■ 緒方 和美

■ 竹本 義子

■ 甲斐 美奈子

■ 塚崎 聖子

■ 柿原 康伸

■ 原元 鼓

■ 杉谷 俊一

■ 丸尾 宏一

■ 大道寺 里子

■ 和田 和子



杉谷 俊一
ワタシトワタシタチ 100F



原元 鼓
あと一息 100F



緒方 和美
逢いたくて 100F



和田 和子
水の音 鳥の声 116.7×145.4cm



甲斐 美奈子
回想 I 100F



塚崎 聖子
黒い雨の止む刻 130F



竹本 義子
キッチンの詩 (ウタ) 100F



蛭田 美保子
食像崇拜 100F



大道寺 里子
いつしか時は・・・ 100F



柿原 康伸
運河とタンクの立つ街 100P



丸尾 宏一
a ravine 100P

彫刻

ギャラリーせいほう

2/6 MON - 2/17 FRI

新制作協会賞 受賞者

■ 北島 一夫

第 80 回記念賞 受賞者

■ 小松 俊介

新作家賞 受賞者

■ 小川原 隆太

■ 香取 宏幸

■ 田島 享央己

■ 加藤 有造

■ 小柳 順

80⇒81 回新制作展彫刻部シード作家：加藤 有造、香取 宏幸、田島 享央己



小川原 隆太
qualia ブロンズ



小松 俊介 / 静かに立つ 黒御影石



加藤 有造 / 2014, 16 spring FRP、鉄



北島 一夫 / 立 蛇紋岩



小柳 順 / 白になる 銀杏、楠



田島 享央己 / 猫 樟



香取 宏幸 / 雲脚を追って 楠

SD

建築会館ギャラリー

2/5 SUN - 2/10 FRI

第 80 回記念賞 受賞者

■ おおひら よしこ

新作家賞 受賞者

■ 野口 真理

■ 深尾 雅子

■ 馬場 拓也

■ 福島 夕貴



深尾 雅子 / 頻波-shikunami- 310×20×150cm



おおひら よしこ
守り人 200×150cm



馬場 拓也
黒と白 240×34×253cm



福島 夕貴
水滴 2m以内



野口 真理 / 木からつちへ
40×22×66cm, 35×22×49cm

この頃考えること

絵画部会員 福田 徳樹

本展会期中の一タ、新美術館で開催中のアカデミア美術館所蔵展にティツィアーノ（1480～90頃生、1576没）の晩年作「受胎告知」（1563～65頃）が来ているというので見た。大作だ。豪快なデッサンの中で色彩が輝いている。アカデミアはそれほど大きくないが所蔵品が充実、例えばビエンナーレで現代美術を見て、重く考えさせられて帰る日であっても、旅を整理しようと、いつしか見に行くことが習慣のようになっていた。そして伝説では100歳までも生きたという彼の1576年の最晩年作「ピエタ」（3.52×3.49m）の前にたたずむ。これは自らの奥津城を描いたともいう。「聖愛と俗愛」（ローマ、ボルゲーゼ美術館、1515年頃）といかに違っているか。「ピエタ」では線描的な部分などひん曲がってしまっている。暗い。けれど深く、強い。印象派など超えてしまったかの描写だ。

ところで今回、それほど人の混んでいない会場にティントレット（1518～1594）の「動物の創造」が来ていて驚いた。明け方か、不思議の光に満ちた中を、大きな全身の神が飛ぶ。空の鳥や海には種々の魚が、共に一方向に神と気を一つにするように。右下の岸边には兎や馬なども。その異環境の場を祝福するかのような。30代初め頃の作という。（1.51×2.58m）。充実の年令だろう。ティントレットは染めものの屋の出とのいわれもあるが、透明な色彩、そして生気に満ちたデッサン。私にとって、ティントレットを好むに到った理由は同じくアカデミアの彼の「聖マルコの遺骸を救うアレクサンドリアの信者たち」（1562～64頃作）のような超大作（3.98×3.37m）などを見てからだ。大作にしなければすまない構図としての意味があったのだ。



ヤコポ・ティントレット《動物の創造》1550-53年
油絵 / カンヴァス ヴェネツィア、アカデミア美術館

ティントレットにはなつかしい思い出がある。1954年、G 大生になった最初に、少しディレクタント的なところがある山田智三郎先生の演習の最初の時間、1年生など出てはいけないうのにもぐりこんだら、いきなり「動物の創造」のモノクロ・スライドを写し、これは誰の絵かという。10人くらいの1人も手を上げられなかった中で、後に阪大教授となった1学年上の T 氏がたちどころに正答してみせた。

今、こんな作品が吾々と同じ会期中に、すぐ隣に見られる。そしてダリ展も開かれた。不思議といえばそれまでだが。

もうすぐ30年になるが、日本の近代美術などと気楽に言うが、その「近代」とは本当はいつから始まったのかという命題について、研究者も明らかでない状態から、学会を作って活動しようと吾々十数人が2年ほどかけて準備「明治美術研究会」（後に学会）を作り、若い人々に発表の場を与えようと、年3回ほどの活動を始めた。今は立派な会誌も発行されている。老若問わず、終わってからの宴会目的の人もないではないが、自由な雰囲気から今会員が350人。それとは別だが、今春、G 大に国際芸術創造研究科という組織ができ、昔の一女子学生で、金沢21世紀美術館の立ち上げなどに付いた俊秀が帰学して、先頃、フランス政治学院副学長ブルーノ・ラトゥール氏を招き「美学の三つの新しい風土的体制—科学・芸術・政治」とした講演があり、申込制だが行ってみた。鉱物学から哲学に進んだ人で60歳半ばか。「吾々は決して近代というところにはいなかった」と極めて刺激的な

テーゼを副題としてあげている。このタイトルは、一種のキャッチコピーであり、フランスの哲学者らしく、現代美術についての関心にもとづく、アクチュアルな発言があった。例えば2013年、ミラノでのサラセノのインスタレーション。おそらく格納庫とおぼしい大倉庫の天井高く、大きな厚手の少し不透明なビニール布がかけ渡してある。それを発表者はモノクロフィルムで下から撮っている。中で、何人もの人が蟻のように蠢いている。あがき続け。近寄ろうとするカップルもすぐ様転げ、滑り落ちて行く。ひたすら、そのものがく様を見続ける。

また一つ、どこかフランス中部の根の長い芝生の中に数十人のれっきとして着飾った紳士、淑女が立ちつくしている。座席はない。左端に演壇らしきものが少し見え、造園家で哲学者が何か、おそらくはエコロジカルな問題を話しているらしい。海洋エネルギーの有効活用ということも語られていたという。新しい気候体制としての市民性を作ろうという試みという。氏は『虚構の「近代」』という大著を2008年にすでに出していた。近代を虚構とのみ見ることなどできない相談だろう。しかし近代の細部のわなにはまり、新しさとは何かを考えることをおこたってはならない。話が終わって灯りのついた部屋のスクリーンに英語で“prepare for a hard landing”という言葉が、会が終わっても写し出されていた。“困難な着地になるという覚悟（用意）をせよ”とでもいうのか。なお、演者に質問しながら進める若い女性の同時通訳者のみごとなさをつけ加えておきたい。

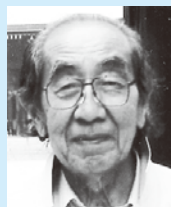
(2016.10.17)

訃報（平成29年5月9日現在）

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

高津 テツロウ 氏
絵画部会員

平成 29 年 2 月 20 日逝去
(享年 87 才)



江戸 健 氏
絵画部会員

平成 29 年 5 月 5 日逝去
(享年 90 才)



断想

彫刻部会員 山縣 壽夫

1962年秋、この頃はまだ自由に海外に出ることが認められず、若者にとっては公費留学生が唯一の出国手段であったが、運よく私はミラノに行くことを許された。留学生の義務として現地の公的な組織に属することを求められ、当時ミラノの美術学校で教えておられたマリノ・マリーニの許に行くことを選んだ。マリーニは既に世界に名を知られた大家であり周囲の誰からも尊敬される大作家であったが、現地の若い作家達の関心はマリーニ先生と同世代であるルーチョ・フォンターナを初めとする次の世代の作家たちの方に向いていることは、暫くするうちに明確に察せられた。

フォンターナの空間主義宣言後の50年代のミラノは、残念ながら全く知らないのだが、友人達からは新しい美術へのエネルギーと熱気に満ちていて面白かったと幾度も聞かされた。私も現役作家のフォンターナには幾度となく現場で顔を合わせることがあり、この60年代初めのミラノにもその余韻は十分感じ取ることが出来たと思っている。

少し話は変わるが同じ頃街の中心部の画廊でクリストの作品を見たことがあった。通りから中庭をへだてた向かいにある画廊のウインドウから見えるロープで梱包された巨大な立方体の作品は、四周1メートル程の隙間を残すのみで部屋を埋め尽くし高さは天井に達していたが、この展示は幾度その前を通っても続けられており、正確な記憶ではないが恐らく六か月以上に亘ったのではないかと思う。当時この事は文化に対する社会構造の違いの様に思い戸惑いを感じたことであった。そして60年代の後半になるとアルテ・ポーベラ（貧しい芸術）という美術運動が起こされ、これには友人の一人も中心メンバーとして参加したので本当に身近に起きた揺さぶりとして強く心の中に焼き付いている。

上述の様な状況の中で過ごした私は70年代初めの夏、丸9年ぶりに一時帰国する機会を得、その年の新制作展を上野で久し振りに見る事が出来た。会場の彫刻室に入ったとき、正直に申し上げてまず驚いたのは9年前と寸分違わぬ全く同じ空間がそこに有ったことであった。

その時の私は、逆さ浦島太郎になってしまったというか、今まで自分が居た場とは大きく異なった異質の土俵の上に立たされた様に感じ困惑してしまったことを明確に想い出している。

それから5年後最終的に帰国した後も会に出品できない状態が数年続いた。私が復帰出来たのは幾人かの先輩友人の存在が大きかったと思っている。特に亡くなられた先輩である土谷武さんの、新制作を自分の発表の場に定め、同時に若い後続の作家の為の場を創ろうとする軸のぶれない姿勢に接したことが大きなきっかけであったと云わねばならない。

話はまた1962年のミラノに戻ってしまうが、貧乏留学生の私は、客の全員が男で又その殆どがイタリア南部からの出稼ぎ労働者の、トリッパという牛の胃袋の煮込み料理の息の詰まりそうな匂いに満ちた食堂に仕方なく毎日のように通っていた。ここで地中海に浮かぶサルデーニヤ島から来たという三人の若者とすぐ知り合いになった。彼らは頑丈で小柄で浅黒い顔に髭を生やし、人間の尊厳さと野卑さ、素朴さと抜け目のなさを併せ持っているかの様に思われた。毎日一緒に食事をする時彼らがいつも口にしたのは、自分たちの故郷の自然のとてつもない素晴らしさ、家族を中心とした地域社会の在り様の自慢であった。それは現に働きに来ている都市社会から彼らが明らかに疎外されていることへの反発の故と思われたが、何故かその話は気にかかり心のどこかに残り続けていたのだった。

十年前私は急に思い立ってその地サルデーニヤを訪れた。勿論昔の知人の消息は知る由もないが目も眩むような美しさに変化に富んだ自然、そして想像することでもできなかった、体で実感できる歴史の重なりと今への繋がり、質の高い濃密な文化遺産、そして優しさを持った多くの人達に魅せられて一か月近くを過ごした。

S.Andrea Priu のネクロポリスはこの四国程の大きさの島の内陸部にあり新石器時代、五千数百年前の大小15個程の人間の手

で掘り穿たれた洞窟と、牡牛の像と呼ばれる巨像から成り立っている。なかでも最大の洞窟は、奥に向かって大きな部屋が3室連なり、その周囲に十数室の小部屋を配する複雑なプランを持つ。当初の墳墓・祭室という目的から、ヌラーゲ時代というこの島独自の時代を含めフェニキア・ローマと続く数千年の時を経て、四・五世紀には初期キリスト教の教会に転用され、ビザンチン時代を通し中世末期まで使われていたことは、今に残る見事なフレスコの女性像や鳥、そして天井の素晴らしい装飾フレスコに見ることが出来る。

中世以降どの様に使われていたかは詳らかでない様だが、近年まで羊や牛と共に牧童たちの寝泊りや休み場となり、焚火などによって真っ黒に煤けていた内部が修復され、このフレスコが甦ったのはごく最近、二十世紀も後半の事であった。

初夏の一日、その場を立ち去ろうと最後に振り返った時洞窟の上、石像の近くに一頭の漆黒の牡牛が立つのを見た。広大な放牧原が後ろに広がっているのこのこと自体は不思議ではないが、この牛は五千数百年の時間と今を直結する象徴となり、形象化された時間となって私をのみ込んだ。以来このことを形に表してみたいと思い続けている。



S.Andrea Priu のネクロポリスと牛



S.Andrea Priu のネクロポリス遠望

《物故会員 展覧会情報》

◆ 1月21日～2月12日の期間、福島県立美術館にて故・鎌田正蔵氏の作品が新収蔵作品として展覧会「新収蔵 鎌田正蔵展」に展示されました。



◆ 2月25日、金沢美術工芸大学にて故・清水良治氏の展覧会「清水良治のサンチョパンサをみる会」が開催されました。



◆ 2月28日～3月11日の期間、日動画廊にて故・脇田和氏と故・奥村光正氏の展覧会「脇田和・奥村光正 響きあう色彩」が開催されました。



《練馬区立美術館からのお知らせ》

藤島武二生誕150周年を記念して、全国3カ所で「生誕150年記念 藤島武二展」が開催されます。

- ◆ 練馬区立美術館
2017年7月23日(日)～9月18日(月・祝)
- ◆ 鹿児島市立美術館
2017年9月29日(金)～11月5日(日)
- ◆ 神戸市立小磯記念美術館
2017年11月18日(土)～2018年1月28日(日)

藤島武二(1867-1943)は多くの優品を遺し、小磯良平、猪熊弦一郎など、次世代の画家たちに多大な影響を与えた、日本近代洋画の牽引者として知られています。今回の展覧会では、雑誌の挿絵や書籍の装幀などの業績を通して明治浪漫主義との関わりにもスポットを当て、また、初公開となる作品や資料もご紹介することで、藤島芸術の裾野の広さを再検証します。

《巡回展日程》

- 新制作展(神戸)
兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリー
11/1(水)～11/8(水) ※休館日11/6(月)
- 名古屋展
愛知県芸術文化センター 8Fギャラリー
11/21(火)～11/26(日) ※休館日なし

《地方展のお知らせ》

- ◆ 5月2日～5月7日の期間、広島県立美術館県民ギャラリーにて「第57回新制作広島グループ展」が開催されました。
- ◆ 5月2日～5月7日の期間、愛知県美術館ギャラリーにて「中部新制作絵画展」が開催されました。
- ◆ 5月31日～6月4日の期間、兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリーにて「第70回関西新制作展」が開催されます。
- ◆ 6月25日、「神奈川(東京)新制作 研究会」がアートフォーラムあざみ野内 市民ギャラリーあざみ野展示室2階B室にて開催されます。

《都美セレクション 新鋭美術家2017》

◆ 2月19日～3月15日の期間、東京都美術館にて「公募団体ベストセレクション 美術2016」展の出品作家の中から、新鋭作家5名を個展形式で紹介する展覧会に彫刻部会員・増井岳人氏の作品が出品されました。



応募規定変更のお知らせ — 彫刻部門 —

作品サイズ規定が変更になりました。
単体作品、組作品ともサイズはフリー。
但し、搬入経路エレベーターで運搬可能のものとする。

- ※ エレベーター内寸:
(H300×W250×D350cm、耐荷重4t)
- * 室内:1点の総重量2t以内
(床面積に対して1.5t / m²)
- * 野外:1点の総重量5t以内
(床面積に対して2t / m²)

《伝言板》

◆ 図録のバックナンバーについて
引き続き寄贈可能な号がありましたら、皆様ぜひご協力をお願いいたします。

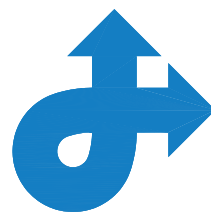
《新制作 — 表紙の言葉》

昨年10月にミラノの彫刻家、吾妻兼治郎氏が90歳で亡くなった。特攻隊からイタリアを代表する彫刻家になった新制作の受賞者だ。以前、故郷が同じ山形ということで人に紹介されミラノのアトリエを訪ねたことがあった。その折、『無』という氏が書いた詩画集をいただいたのを思い出し読み返した。「静寂の中の静、純白の中の白、純粹の中の純粹…」禅の思想と共にきわめて理想主義的で超越的な言葉が目飛び込んできた。かつて新制作には、今にも増して理想主義的で超越的な雰囲気があったのかもしれない。氏は更に理想を求め日本からイタリアへと羽ばたいていった。優れた作家を輩出し、そのすばらしさに触れられる新制作に感謝したい。

(絵画部会員・木嶋正吾)

編集後記

今年から久しぶりに会報の編集に携わることになりました。時代とともに会報の役割も変化していく中で、過去の踏襲で良いのか、それとも全面的な刷新が必要なのか考えています。皆様のご意見などは是非お寄せください。また今号以降、カットも順次掲載していきたいと思っております。今号、ご協力下さった会員の皆様、ありがとうございました。(山口)



新制作協会

〒160-0022
東京都新宿区新宿 6-28-10 大阪屋ビル202
Tel: 03-6233-7008 Fax: 03-6233-7009
URL: <http://www.shinseisaku.net/>
E-mail: webmaster@shinseisaku.net

発行 / 新制作協会

企画・編集・制作 / 広報委員会 広報誌編集委員
千葉 文隆、山口 都、岩間 弘、
本田 悦久、中野 威

監修 / 石松 豊秋

発行日 / 2017年5月

表紙絵 / 木嶋 正吾 「零形15-1」 2015年
第79回新制作展出品作品

* 広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務局迄ご連絡ください。